

南島憧憬の行方

— 中島敦におけるアンチ〈近代〉の思考 —

陳 愛 華
(2004年9月30日受理)

Dreams of Southern Islands: Thoughts of Anti-Modern of Nakajima Atsushi

Chen Aihua

In recent years, Nakajima Atsushi has been regarded very highly for his works about the South Sea Islands in World War II and he has been looked frequently as a resistant, yet some signs in those works suggest that his way of thinking changed as time passed.

The aim of this essay is to describe how his thoughts changed and to find out his thinking on the then international situation, especially his ideas about what Japan should be. These issues will be argued by focusing on his thoughts of anti-Modern.

Key words : Nakajima Atsushi, dreams of southern islands, anti-Modern
キーワード：中島敦, 南島憧憬, アンチ近代

1. 問題の所在と目的, 方法

中島敦(1909~1942)は南島¹と縁の深い作家と言える。その短い生涯の中で中島は数回にわたって南の島々を訪れている²。特に1941年7月から翌年3月にかけての南洋群島滞在は、彼を論じる上で看過できない重要な体験である。その作品においても、南島の表象は1929年の初期習作に既に見られ、南洋滞在前の『光と風と夢』などを経て、1942年に発表した作品群『南島譚』と『環礁』とにその到達点を見せている。

ここ数十年、ポストコロニアル研究やオリエンタリズム研究が盛んになる中で、中島と南島との関り、特に南洋群島での滞在に注目し、その南島関連の作品に光を当てた論考が少なからず行われた。これらの研究には、中島の南島表象の中からポジティブな要素を汲み上げ、国策一色であった戦時下の文壇における貴重

な存在として彼を称揚する傾向が共通して見られる³。例えば、小森陽一は次のように論じている。

争闘や確執、敵対や相克が隠蔽されることは決してない。中島敦は修羅場しか書かないのである。それを可能にしたのは、他者への違和感と、こちらからは了解不可能な他者が現に存在するという感覚を、保持しつづけようとする、中島敦のエクリチュールを刺し貫く意志である。その意味で、中島敦の言説は、侵略戦争を「大東亜の解放」と謳い、異民族と異国に対する支配を「八紘一宇」のように記述する言説の対極にあると言わねばならない。⁴

近年の積極的な評価は主に二つの点に依拠している。一つは中島が植民地政策批判を行った点である。もう一つは小森も言及した、「了解不可能な他者」というモチーフが作品群『南島譚』『環礁』に見られるという点である。

しかし、時代の中に生きる生身の人間として、果たして中島はそうに無垢な存在であり得たのであろうか。一方、アメリカ人研究者のドナルド・キーンが中島の『光と風と夢』を次のように批判している。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：水島裕雅(主任指導教員)、町博光、
岩崎文人、中村春作、李国棟(文学研究科)。

しかし、それにも増して中島が書いたスチーブソンの生活と思索の物語には際立った特徴があるので、それは大東亜戦争の理想をスチーブソンに言わせたことである。⁵

小森を代表とする近年の研究に太平洋戦争中の作家を見る際の日本人の観点が現れているとすれば、キーンの批判はアメリカ人の見方を表していると言える。しかし、このような異なる意見が存在するにもかかわらず、近年の積極的な評価においてキーンの中島批判が触れられることはなく、二つの見方は対立したまま並行している。

二つの見方のうち、どちらが正しいかをここで議論するつもりはない。このように相反する意見の存在はすでに戦時下の作家を評価することの難しさを示している。この際、追従か抵抗かを問うなどの、二元論的な従来の評価軸はもはや無効となる。代わって、南島をめぐる記述の中に時代に対するどのような思考が見られ、それにはどのような可能性が潜み、またどこで挫折を迎えざるを得なかったかを検討する作業が要求されると思われる。中島の場合、検討に値する豊富な素材が存在するにもかかわらず、そのような作業は未だ十分に行われていない。本論ではこのような問題意識の下で、戦時下の日本を生き延びた若き知識人の思考の記録として中島の南島に関する記述を読み、中島における南島の問題の内実を追究したい。方法としては、中島の初期から晩年までの南島をめぐる記述をトータルに捉え、時間軸に沿ってその変化の軌跡を描いていく。これまでほとんど言及されなかった『蕨・竹・老人』や『風物抄』なども視野に入れて、南島が登場する中島の作品および南洋群島滞在中に書かれた日記や書簡など、南島に関する記述全般を考察の対象にする。

2. 南島憧憬の発生 — 〈近代〉からの逃避 —

中島文学における「南島」の登場は早くも高校時代の習作、『蕨・竹・老人』に見られる。この作品において、語り手の「私」は東京を離れて旅に出る。そもそも「私」が旅に出た原因は、作品の冒頭と末尾に現れた東京のイメージから窺えるように、「陰鬱な煤煙と塵埃と」に象徴される近代都市東京への嫌悪にあった。そして、旅の最後に、「私」は「南」に向かうのである。

翌日、私は南に発ちました。
そして今迄の山の中の淡色とちがって、ひどく色

彩の強い風景を一脂ぎった海や、黒緑色に盛り上った島々や、強い日光の中に赤茶けて輝く断崖や一見しました。(2, p.66)

短い一節であるが、これが中島の作品における南の海と島々を描いた最初の一節である。東京のイメージと合わせて見れば、明るい南島の風景と「陰鬱」な近代都市とが作品の中で鮮明なコントラストをなしている。さらに、南島が登場する文脈を整理すると、東京を離れた「私」は旅先の伊豆の村で近代以前の風景と人情に出会い、はじめは心酔するが、滞在しているうちに、村人の倫理観の変化や軍国主義思想の浸透などに近寄る近代化の影を見るようになる。そこで、「私」は村を出ようと決心し、「南」に向かう。すなわち、日本の近代化に対する逃避と抵抗の旅の最後に、南島が目指されたわけである。言い換えれば、この作品において、南島は近代化に抗する最後の砦を担う存在である。中島における南島の問題を見るには、その南島憧憬がこのような所から出発していることを念頭に入れておく必要があるだろう。

日本の南進論が発生した時代背景について、清水元は「当時の対外思想に、近代化の過程で喪失されていくものへの愛惜の情とこの宿命を押しつけてきた西欧近代文明への反感という心象が大なり小なり影を落としていた」⁶と指摘する。南島の描写が初めて登場した『蕨・竹・老人』はまさに「近代化の過程で喪失されていくものへの愛惜の情」が行間に溢れ出ている作品である。

一方、そのような心情と表裏を成すように、「西欧近代文明への反感」も中島の南島憧憬を支える要素の一つであった。たとえば、イギリス人作家スチーブソンを描いた『光と風と夢』⁷の中で、彼は主人公のスチーブソンにサモア島の豚に関する次のような感想を發させている。

豚の悪戯には全く弱る。欧羅巴の豚のような、文明のために去勢されて了ったものとは、全然違ふ。実に野性的で活力的で遅しく、美しいとさえ言つていいかも知れぬ。(1, p.107)

ここでは南島そのものに対する認識が南島の豚の印象を通して語られている。「野性的で活力的で遅しく、美しい」南島は、「欧羅巴」の「文明」の対極に位置づけられた。南島に対するこのような認識は、南洋群島に赴任した初期まで存在し続けたと見られる。妻に宛てた書簡の中で中島は島々の中で「一番開けていない」ヤルト島が「一番好き」⁸と述懐し、未開、つま

り、文明化されていないところに南島の価値を見出し
ている。近代西欧文明に対するアンチテーゼとしての
南島。このような南島認識が中島の南島憧憬の根本に
あったのである。

3. スチーブンスンの抵抗 —内部からの〈近代〉批判—

『光と風と夢』の中に、南島における西洋の植民地
政策に対する痛烈な批判が見られる。ここで重要な
のは、それらすべてがスチーブンスンの口を通してな
されているということである。

此の島に来た最初から、ステイヴンスンは、此処に
いる白人達の・土人の扱い方に、腹が立って堪らな
かった。サモアにとって禍なことに、彼等白人は悉
く一政務長官から島巡り行商人に至る迄一金儲けの
為にのみ来ているのだ。これには、英・米・独、の
区別はなかった。彼等の中誰一人として（極く少数
の牧師達を除けば）此の島と、島の人々を愛するが
為に此処に留まっているという者が無いのだ。ス
ティヴンスンは初め呆れ、それから腹を立てた。植
民地常識から考えれば、之は、呆れるほうがよっぽ
どおかしいのかも知れないが、彼はむきになって遙
かロンドン・タイムズに寄稿し、島の此の状態を訴
えた。白人の横暴、傲岸、無恥。土人の惨めさ、
等々。しかし、この公開状は、冷笑を以て報いら
れたに過ぎなかった。大小説家の驚くべき政治的無
知、云々。

(1, pp.129~130)

太平洋戦争前夜の日本において、西洋人に西洋を批
判させるのは見方によれば、日本の東亜進出を正当化
する行為とされても不思議ではない。しかし、初期作
品から日本の軍国主義を批判し、植民地朝鮮、満洲の
現実を暴露する⁹など、日本の植民地政策を批判し続
けてきた中島のことを考えると、むしろ反時局的な要
素が強いのではないかと思われる。日本の植民地を描
いた中島の初期作品には、資源の略奪や差別など、ス
チーブンスンがサモア島で見たのとまさに同じ現実が
暴かれている。また、『光と風と夢』のスチーブンス
ンについて先行研究では、自分と同じく呼吸器の病を
患い、文明を嫌い、文学に悩み、政治に対する批判意
識を持つイギリス人作家に、中島が多大な共感を寄せ
て自らを重ね合わせるようにその人物を造形したとい
うのがほぼ定説となっている。これらの点を踏まえて
考えれば、『光と風と夢』におけるスチーブンスンの

西洋植民地政策批判には、中島の日本植民地政策批判
が投影していると思われる。つまり、スチーブンスン
の西洋批判という作品の表の構図は、これを反転させ
れば、中島の日本批判という深層の構図が浮かび上
がってくる。言い換えれば、『光と風と夢』には西洋
人による西洋植民地政策批判と、日本人による日本植
民地政策批判の二重の意味が込められているのであ
る。

「彼ら」西洋人を批判して「我々」日本人の正当性
を主張するのが当時の国策である中、スチーブンスン
の西洋批判を描き、その上に日本に対する自己批判を
重ねあわせた『光と風と夢』は、当時の為政者たちが
立てた東洋と西洋の対立図式から逸脱した作品と言え
よう。そこに現れているのは、東西を問わずに、殖民
地主義を生み出した〈近代〉というものを、その内部
に立って批判しようとする眼差しである。

ところが、このような可能性を見出して肯定すると
同時に、中島の植民地主義批判の限界をも指摘しなけ
ればならない。同じく『光と風と夢』にある次の一節
を見よう。

此の地に隠退している、ニュージーランドの父、
サー・ジョージ・グレイに会った。政治家嫌いの私
が彼に面会を求めたのは、彼が人間であることを一
マオリ族にもっとも博大な人間愛を注いだ人間であ
ることを信じたからだ。会って見ると、果たして立
派な老人だった。彼は実に良く土人を一その微妙な
生活感情に至る迄、知っている。彼は真にマオリ人
の身になって、彼等のことを考えてやった。植民地
総督として全く異例のことだ。彼は、マオリ人に英
人と同等の政治上の権力を与え、土人代議士の選出
を認めた。そのため白人移民に欣ばれず、職を辞し
たのである。しかし、彼の斯うした努力のお蔭で、
ニュージーランドは今最も理想的な植民地になっ
ているのだ。(1, p.163)

植民地政策を批判する傍らで、中島はまた「理想的
な植民地」を夢見ている。サモア島の植民者を批判し
た前の一節とこの一節とに、「愛」という言葉が繰り
返して現れている。ここに、植民地政策を批判してき
た中島の限界を見ることができるといえる。というのは、植民
地における「愛」に対する幻想と過信が存在する限
り、徹底した植民地主義批判は不可能であるというこ
とを、我々は知っているからである。

4. 自省の姿 —揺らぐ日本批判—

1941年6月、中島は南洋庁国語編集書記官の職を受け、南洋群島に向けて出発した。役人という身分に抵抗があったものの、長く憧れていた南島での初めての長期滞在だけに、多くの期待を抱いていたのに違いない。しかし、現実の南島は楽園ではなかった。現地の様子を、中島は次のように伝えた。

現下の時局では、土民教育など殆ど問題にされておらず、土民は労働者として、使いつぶして差支えなしというのが為政者の方針らしく見えます、之で、今迄多少は持っていた・此の仕事への熱意も、すっかり失せ果てました。¹⁰ (3, pp.627~628)

また、妻への手紙の中で中島は次のように語った。

オレはもう、すっかり、編纂の仕事に熱が持たなくなつて了つた。土人が嫌いだからではない。土人を愛するからだよ。¹¹ (3, p.631)

自らの島民に対する「愛」を語り、南洋庁の植民地政策に「愛」のないことを暗に批判する中島の姿がここに見られる。さらに、次の二節においても、同じく「愛」のない植民地教育に批判の目が向けられている。

校長及訓導の酷烈なる生徒取扱に驚く。オウクニヌシノミコトの発音をよくせざる生徒数名、何時迄も立たされて練習しつつあり。桃色のシャツを着け、短き笞を手にする小さき少年(級長なるべし)こましゃくれた顔付にて彼等を叱りつつあり。一般に級長は授業中も室内を歩き廻り、怠けおる生徒を笞うつべく命ぜられおるものの如し。帽子を脱ぐにも一、二、と号令を掛けしむるは、如何なる趣味にや。¹² (3, p.484)

この公学校の教育は、ずいぶん、ハゲシイ(というよりヒドイ)教育だ。まるで人間の子を扱っているとは思えない。何のために、あんなにドナリちらすのか、僕にはわからない。¹³ (3, p.648)

これらの批判は、南洋庁の役人として、また日本人としての、日本の植民政策に対する自己反省とも言える。しかし、「愛」の有無を問う考えが、南洋赴任前と変っていないところに注目したい。「愛」に対する信仰が結局、南洋庁の政策に対する中島の自己反省

を不徹底なものにしてしまいかねないからである。作品群『環礁』に南島の風物をスケッチした『風物抄』というエッセイがあるが、その中に次のような興味深い一節がある。

朝、校長の官舎で食事をしていると、遠くから歌声が聞えて来る。愛国行進曲だ。多くの子供等の声と直ぐに分った。声がだんだん近付いて来る。(中略)玄関から外を見ると二十人程の島民児童がちゃんと二列に縦隊を作つてやつて来ているのだ。先頭の一人は紙の日の丸を肩にかついでいる。(中略)みんな、シャツを着ているとはいうものの、破れている部分の方が繋がっている部分より多そうなので、男の子も女の子も真黒な肌が到る所から覗いている。足は勿論全部跣足。(中略)其等のおんぼろをぶら下げた連中が、それぞれ足を思い切り高く上げ手を大きく振りつつ、あらん限りの声を張上げて(校長官舎の庭にさし掛かると、又一段と声が大きくなったようだ)朝の椰子影の長く曳いた運動場へと行進して行くのは、中々に微笑ましい跳めであつた。(1, p.303)

ここに、「愛国行進曲」を歌いながら、「紙の日の丸を肩にかついで」登校してくる島民の子供たちを見て「微笑ましい」と言う中島がいる。皇民化教育や、子供たちの身なりの貧しさに植民地支配の実態が露呈しているにもかかわらず、このような植民地の教育現場を中島は「微笑ましい」ものと見ている。「笞」による「ハゲシイ」教育しかなく、「愛」のない学校の現状に中島は憤慨するのだが、そのような暴力性が表面化しない場合、南島での日本の植民地支配に対して中島は曖昧な態度を示しているのである。言い換えれば、彼の批判は「笞」や「ドナリちらす」ことに向けられているのであり、「オウクニヌシノミコト」を教えることや「日の丸」の旗を担がせ、「愛国行進曲」を歌わせることに対するものではないのである。さらに、短編『鶏』にある次の一節を見れば、語り手の「私」は屈折した口調で、島民に対する威圧的な態度を取るのも仕方がなく、場合によっては効果があるとさえ認めているのが分かる。

私自身に就いて云うならば、斯ういう島民の扱い方に対して別に人道主義的な響感も感じないが、ざりとて之を以て最上の遣り方と推奨することにも多分の躊躇感を感じる。断乎たる強制一点張が、へんに彼らを甘やかすよりも効果的であるのは言うまでもない。いや、困つたことに、周到な用意を伴つた誠

心誠意よりも、尚且つ、単なる強制の方が良い結果をあげる場合が甚だ多いのである。勿論、それが果して彼等を心服せしめてのことか、どうか、それは疑わしいにしても、我々の常識にとって再び困ったことに、断乎たる強圧が彼等を単に表面ばかりでなく、本当に心底から驚嘆感服せしめる場合も確かに在り得るのだ。(1, p.241)

近年、植民地政策を積極的に批判したとして中島は高い評価を受けてきた。確かに、言論統制が次第に厳しくなる当時の状況を考えれば、国の政策に対して批判的な姿勢を保ち続けることだけでも評価の対象となりうる。しかし、上で見たように、「愛」に対する幻想がある限り、中島の批判は殖民主義に対する徹底的な批判にはなれず、日本に対する真の意味での自己反省とも言えないのである。

5. 「借り物」の目の棄却 — 日本独自の主張 —

日本の植民地政策批判以外にも、南洋滞在中島にもたらした自己反省の契機はあった。作品群『環礁』にある『マリヤン』という短編の中で、中島は「ミクロネシア・カナカの典型的な顔をしていながら、「頭脳の内容は殆どカナカではなくなっている」マリヤンという名の女性を描いている。

私はマリヤンの盛装した姿を見たことがある。真白い洋装にハイ・ヒールを穿き、短い洋傘を手にしたいでちである。彼女の顔色は例によって生々と、或いはテラテラと茶褐色に飽く迄光り輝き、短い袖からは鬼をもひしぎそうな赤銅色の太い腕が逞しく出ており、円柱の如き足の下で、靴の細く高い踵が折れそうに見えた。貧弱な体躯を有った者の・体格的優越者に対する偏見を力めて排しようとはしながらも、私は何かしら可笑しさがこみ上げて来るのを禁じ得なかった。が、それと同時に、何時か彼女の部屋で「英詩選訳」を発見した時のようないたまじさを再び感じたことも事実である。但し、此の場合も亦、そのいたまじさが、純白のドレスに対してやら、それを着けた当人に対してやら、はっきりしなかったのだが。(1, pp.287~288)

洋装を身にまとい、『英詩選訳』を読むマリヤンを見て、日本人の語り手「私」は「いたまじさ」を感じたと言う。「純白のドレスに対してやら、それを着けた当人に対してやら、はっきりしなかった」と書いて

あるが、それは「ドレス」、つまり、西洋文明に対するものでもあり、同時に「それを着けた当人」、つまり、西洋文明に染まりつつある南島の人間に対するものでもあろう。さらに、そのしみじみとした口調から窺えば、語り手はマリヤンを見ているうちに、日本人としての自分自身の「いたまじさ」にも気づかされたのではないかと思われる。同じく『環礁』の一編で、独白の形式を採るエッセイ『真昼』の中に、そうと思わせる次のような一節がある。

「怠惰でも無為でも構わない。本当にお前が何の悔いも無くあるならば、人工の・ヨーロッパの・近代の・亡霊から完全に解放されているならばだ。所が、実際は、何時何処にいたってお前は前なのだ。銀杏の葉の散る神宮外苑をうそ寒く歩いていた時も、島民共と石焼のパンの実にむしゃぶりついている時も、お前は何時もお前だ。少しも変わりませぬ。ただ、陽光と熱風とが一時的な厚い面被を一寸お前の意識の上にかぶせているだけだ。お前は今、輝く海と空とを眺めていると思っている。或いは島民と同じ目で眺めていると自惚れているのかも知れぬ。とんでもない。お前は実は、海も空も見えておりはせぬのだ。ただ空間の彼方に目を向けながら心の中で Elle est retrouvée!—Quoi?—L'Eternité. C'est la mer mêlée au soleil. (見付かったぞ!何が?永遠が。陽と溶け合った海原が)と呪文のように繰返しているだけなのだ。お前は島民を見ておりはせぬ。ゴーガンの複製を見ておるだけだ。ミクロネシアを見ておるのでもない。ロティとメルヴィルの画いたポリネシアの色褪せた再現を見ておるに過ぎぬのだ。そんな青ざめた殻をくつつけている目で、何が永遠だ。哀れな奴目!」(1, pp.278~279)

「人工の・ヨーロッパの・近代の・亡霊から完全に解放されたい」という願望は、南島憧憬を抱き始めた時期の中島を再び想起させる。そして、「色褪せた再現」という表現に明らかなように、ここには西洋近代文明の影響を強く受けて自分の目を持ってなくなり、西洋に対する中途半端な追随しかできなくなった自分への反省が現れている。また、西洋近代文明に「亡霊」「青ざめた殻」といった表現が与えられることから、それが極めて否定的に捉えられているのが分かる。さらに、この引用に続く次の一節を見よう。

「いや、気を付けろよ」と、もう一つの別な声がある。「未開は決して健康ではないぞ。怠惰が健康でないように。謬った文明逃避ほど危険なものはない。」

「そうだ」と先刻の声が答える。「確かに、未開は健康ではない。少なくとも現代では。しかし、それでも、お前の文明よりはまだしも澆刺としてはしないか。いや、大体、健康不健康は文明未開ということと係わり無きものだ。現実を恐れぬ者は、借り物でない・己の目でハッキリ視る者は、何時どのような環境にいても健康なのだ。所が、お前の中にいる『古代支那の衣冠を着けたいかさま君子』や『ヴォルテール面をした狡そうな道化』と来たら、どうだ。」(1, p.279)

〈近代〉からの逃避を望むうちに、中島は南島に憧憬を抱くようになった。そして、南島に赴き、西洋化されつつある南島の姿を目の当たりにすることによって、中島の中に日本の近代化に対する反省が再び喚起されたと見られる。「借り物でない・己の目でハッキリ視る」ことを声高に唱える中島の姿に、一種の焦燥感さえ感じられる。さらに、西洋的なもののみならず、中国的なものも「借り物」とされている点に注目すれば、ここで中島が提唱したのは、単に西洋の近代化に対する模倣からの脱出だけではなく、東西の伝統をともに脱却して日本の独自性を創出することであったのが分かる。

小坂国継は、〈近代〉が「自前のもではなく、借り物であった」という認識を、日本における「近代の超克」論が「とかく復古主義や国粹主義と結びつきやすい理由」¹⁴であると指摘している。南洋群島における皇民化教育に容認の態度を示し、南島の日本化を否定せず、もっぱら南島の西洋化、および受動型の日本の近代化に矛先を向けるこの時期の中島の姿勢には小坂が指摘したような危険性も潜んでいるのではないかと思われる。

6. 幻の「東洋」

近年の研究において、中島の南島文学における「不可解」な島民像がしばしば議論の中心となり、それはまた中島が積極的に評価された所以の一つでもある。その際によく引かれるのが『鶏』の次の一節である。

要するに、私にはまだ島民というものが呑みこめないのだ。そうして、此の島民の心理や生活感情の不可解さは、私にとって、彼等に接することが多くなればなる程益々増して行く。南洋に来た最初の年よりも三年目の方が、三年目より五年目の方が、土人の気持は私にとって一層不可解になって来た。(1, p.242)

確かに、このような「不可解」な島民の認識は須藤直人が評したように「当時の(そして現在においても)日本人には特異な、南洋に対する認識」¹⁵と言える。しかし、それは果たして先行研究が評したような「了解不可能な他者」と言えるのであろうか。

中島が個性を尊重する考えを有していたのは確かである。南洋群島滞在中に発表された短いエッセイ『章魚木』¹⁶を通して、その点を見ることができる。『章魚木』において、「たこのき」は南島および島民の暗喩として機能する。個性的で生き生きとした「たこのき」に覚えた感動と、個性のない「たこのき」を見た際の失望とに、個性のなくおとなしい「日本国民」を育てようとする南洋庁の教育方針に対する中島の批判が表されている。皇民化教育そのものを否定してはいないが、「不可解」な島民像の創出や、個性を尊ぶ主張などから、植民地における差異を認めるべきという考えを、中島は有していたと見られる。没個性で従順な国民を育てようとする政府の企てに対抗し、差異と個性の尊重を唱える中島の考えは、当時の時代においてはきわめて貴重なものである。そのような考えには、植民地における国民統合を破綻させる可能性まで含んでいたと言えよう。

ところが、そのような可能性が存在したにもかかわらず、中島がその後に見せたのはむしろ逆の方向へ傾斜する姿勢であった。『環礁』の最後に位置する『風物抄』を見てみよう。『風物抄』は作品群『南島譚』『環礁』の最後尾に置かれている上、内容が南洋群島の島々を巡った時の所見であるため、両作品群を締めくくる役割を担う作品とも思われる。この作品の冒頭部分は次のようになっている。

朝、目が覚めると、船は停っている様子である。直ぐに甲板に上って見る。

船は既に二つの島の間には入り込んでいた。細かい雨が降っている。今迄見て来た南洋群島の島々とは凡そ変った風景である。少くとも、今甲板から眺めるクサイの島は、どう見ても、ゴーガンの画題ではない。細雨に煙る長汀や、模糊として隠見する翠の山々などは、確かに東洋の絵だ。一汀煙雨杏花寒とか、暮雲卷雨山娟娟とか、そんな讃がついていても一向に不自然に思われぬ・純然たる水墨的な風景である。(1, p.291)

南島の風景を、「東洋の絵」として描くこの冒頭部分は興味深い。南洋の印象の総まとめとも思われる『風物抄』の冒頭に、このような読む者の目を引く表現を出現させ、さらに、漢詩によってそれを際立たせ

るような手法に作意が感じられる。もっとも、この一節を見る限り、儒学者の家系を持ち、漢学の素養が深い中島にしては自然な行為ではないかという意見も出てくるかもしれない。しかし、この一節が実は二度の書き換えを経てこのような形になったことを、見落としてはいけないであろう。以下にその書き換えの様子を確認してみよう。

同じ場面の描写が最初に見られるのは、妻宛の書簡においてである。

眼がさめたら船は、もうクサイの港に入っていた。景色のいい所だよ。かなり高い山がつかつて、その頂に霧のかかっている所など、まるで内地の山みたいだ。¹⁷ (3, p.601)

この段階ではまだ「東洋」という言葉がない。

次に、南洋群島滞在中に書いたエッセイ『旅の手帳から』¹⁸における同じ場面の描写を見よう。

真夏にもたまたまうすら寒い日があるように、南洋にも、時に温帯的な風景がある。

碇泊中の船から眺めたクサイの島はどう見てもゴーガンの画題ではない。細雨に烟る汀や、模糊として隠見する翠の山々などは、八大山人か大雅堂かとにかく確かに東洋の絵である。「一汀煙雨杏花寒」とか、「暮雲卷雨山娟娟」とか、そんな讚がついていても一向に不自然さを感じさせない、純然たる水墨的な風景である。(2, p.14)

『旅の手帳から』は帰国後に発表した『風物抄』と内容の重複が多く、『風物抄』の原型となった作品であると思われる。この中に、「東洋の絵」という表現および漢詩はすでに見られるが、その前に「真夏にもたまたまうすら寒い日があるように、南洋にも、時に温帯的な風景がある」と、先にその偶然性が説明されている。また、「温帯的」という表現の存在によって「東洋」という言葉の重みが軽減されている。

しかし、『風物抄』になると、そのような前置きは消去され、「東洋の絵」と漢詩とがより強いインパクトをもつようになっている。その上、『旅の手帳から』において作品の中ほどに位置していたこの一節が、『風物抄』では作品の冒頭に移動している。このような書き換えの過程から、『風物抄』の冒頭において「南島」の「東洋」的な性質を強調する作者の強い意図が感じられる。

さらに、この冒頭部分に呼応して、『風物抄』の後半にも漢詩を混じえた描写が現れる。

宿舎としてあてがわれた家の入口に、珍しく荔枝の蔓がからみ実が熟してはぜている。裏にはレモンの花が匂う。門外橘花猶的礫、牆頭荔子已爛斑、というのは蘇東坡（彼は南方へ流された）だが、丁度そっくり其の儘の情景である。但し、昔の支那人のいう荔枝と我々の呼ぶ荔枝と、同じものかどうか、それは知らない。そういえば、南洋到る所にある・赤や黄の鮮やかなヒビスカスは、一般に仏桑華といわれているが、王漁洋の「広州竹枝」に、仏桑華下小廻廊云々とある、それと同じものかどうか。広東あたりなら、此の派手な花も大いにふさわしそうな気がするが。(1, p.306)

東アジアの中で南島と関係の深い地域といえば、中国の華南地方がまず挙げられよう。南島の風物を描いた文脈の中に華南が言及され、漢詩が引用されるのは少し唐突な感じもするが、これらも作品冒頭の「東洋の絵」と同じように、南島と「東洋」との一体感を紡ぎだすための設定であったのではないと思われる。このような南島表象に当時の時代背景の投影が見られる。当時の状況を子安宣邦は次のように論じる。

いわゆる「大東亜戦争」の開始は「東亜」を「大東亜」の概念へと拡大させる。この「東亜」から「大東亜」への地域概念の拡大は日本の帝国主義的な戦略的視圏の南方太平洋諸地域への拡大にともなうものであった。この戦争による戦略的視圏の拡大も直ちに学者たちによる後追的な正当化のための理論作業を要請していく。¹⁹

このような時代背景に鑑みると、南島の風景に与えた「東洋の絵」という表現は、当時の国策から見て都合な表現といっても過言ではなからう。

ところで、興味深いことに、「東洋の絵」の描写で始まり、南島に東洋的な性質を見出した『風物抄』には、沖縄の言語的な異質性を描いた次のような一節も存在する。

此処は沖縄県人ばかりの為の一従って、芝居はすべて琉球の言葉で演ぜられる一劇場である。私は、何ということなしに、小屋の中へはいつて見た。相当な入りだ。出しものは二つ。初めのは標準語で演ぜられたので、筋は良く判ったが、極めて愚劣なくすぐり。第二番目の、「史劇北山風雲録」というのになると、今度は言葉がさっぱり分らない。私にははつきり聞き取れたのは「タシカニ」（此の言葉が一番確実に聞き分けられた。）「昔カラコノカタ」「ヤマミ

チ」「トリシマリ」などの数語に過ぎぬ。曾てパラオ本島を十日ばかり徒歩旅行した時、途を聞く相手が皆沖縄県出の農家の人ばかりで、全然言葉が通じないで閉口したことを憶い出した。(1, p.307)

このように、同じ『風物抄』の中に、「東洋」としての南島と、日本と異質な南島とが混在している。このことはどのように理解できようか。

近年の研究は、中島が描出した「不可解」な島民像を、「了解不可能な他者」への認識と捉え、中島の南島表象を「八紘一字」などの同時代言説の対極に位置付けてきた。しかし、『風物抄』に明らかなように、南島の差異性に対する認識と、それが「東洋」であるという一体性の考えとはまったく矛盾しないものとして、中島の中で両立しているのである。

鈴木貞美は、京都学派が座談会「世界史的立場と日本」で打ち出した「大東亜共栄圏思想」を「多元主義の原理と家族的な関係にたつ新たな国家・民族関係をアジアに打ち立てる理念」²⁰とまとめている。また、小坂国継は、京都学派の代表者の一人三木清について、

東亜共同体は民族協同を意図するものであるから、それは単なる民族主義を超えたものであるが、同時にそれは共同体の内部における各民族の独自性を承認するものでなければならない。全体主義は閉鎖的となって排他的・独善的になりやすいから、東亜思想の原理はこのような全体主義ではなく民族協同の協同主義でなければならない。それは個人の自由と個性を認め、公共性と世界性を有するものでなければならない。²¹

とその思想を説明している。『風物抄』を通して見れば、中島の考えにも同時代の「多元主義の原理」や、「民族協同の協同主義」などの思想と共通する要素を有していると言えよう。それはほかでもなく、「東洋」という共通性を有しながらも、その内部に差異と個性の存在を許容するという、南島表象が映し出す彼のアジア認識に由来していると思われるのである。

7. 結 び

太平洋戦争が勃発した際、日中戦争については沈黙してきた中島は、当時の多くの文学者と同様に、アメリカとの開戦に歓声を上げた²²。そして、「大東亜戦争」が進行する中で、中島は『斗南先生』²³を発表し、アジアを救うべき日本の使命を説いた亡き伯父斗南先生を追憶し、その思想への共感を表した。

「もし我をして絶大の果敢、絶大の力量、絶大の抱負あらしめば、我は進んで支那民族分割の運命を挽回せんのみ。四万々生靈を水火塗炭の中に救わんのみ。蓋し大和民族の天職は殆ど之より始まらんか。」思うに「二十世紀の最大問題はそれ殆ど黄白人種の衝突か。」而して、「我に後白人を東亜より駆逐せん絶大理想あり。而して、我が徳我が力能く之を實行するに足らば」則ち始めて日本も救われ、黄人も救われるであろうと。そうして伯父は当時の我が国内各方面に就いて、他日此の絶大實力を貯うべき備ありやを顧み、上に、聖天子おわししながら有君而無臣を慨き、政治に外交に教育に、それぞれ得意の辛辣な皮肉を飛ばして、東亜百年のために国民全般の奮起を促しているのである。

支那事変に先立つこと二十一年、我が国の人口五千万、歳費七億の時代の著作であることを思い、其の論旨の概ね正鵠を得ていることに三造は驚いた。(中略)

大東亜戦争が始まり、ハワイ海戦や馬來沖海戦の報を聞いた時も、三造の先ず思ったのは、此の伯父のことであった。(1, pp.68~69)

この引用に明らかなように、中島も同時代の多くの知識人のように、「大東亜共栄圏」の理想に共鳴した一人であったのである。このように指摘すると、本論の初めの方で触れたロナルド・キーン論に同調していると思われる恐れがあるが、中島について人種主義的な観点を軸においた「大東亜共栄圏」思想の擁護を指摘したキーン論には、近年の積極的な評価に覚えたと同様な性急さによる評価の偏りを覚えている。キーンのように、「大東亜共栄圏」思想を当然な批判対象とみなして、批判するための批判をするのではなく、本論は、「大東亜共栄圏」思想に共鳴するまで、一知識人がどのような思想的な経路を歩んできたかを、表現を通して確認することを目指してきたのである。本論の立場からすれば、「大東亜共栄圏」に共鳴することと、時代の問題に対する積極的な思考や、ヒエラルキーに対して抵抗の精神を保持することとは必ずしも矛盾するものではないのである。

このような立場のもとで、上では南島憧憬から始まる中島と南島との関わりを網羅的に考察し、彼の時代認識の変化を見てきた。その中から見えてきたのは、日本の近代化に対する反感から出発し、文明批判、植民地主義批判を経て、日本の主体性を提唱し、「大東亜」の「共栄」を夢見るまでの、中島が見せた一つの軌跡である。この軌跡について、特に注目したいのは、それが〈近代〉に対する批判的な思考に貫かれて

いるという点である。

ユルゲン・ハーバーマスは〈近代〉をある時代が「古典古代という過去と自己との関係について持つ意識」として定義し、それが、「自分自身を『旧』から『新』への移行の結果として理解」しようとする際に生まれると述べている²⁴。『蕨・竹・老人』に見られる中島の文明批判、古きよき時代への憧れは、新しいものとして生まれ変わろうとする〈近代〉というものに対する反動と言える。しかし、このような反動は、それが古典古代への完全なる回帰でない限り、〈近代〉の枠を超えることはできず、〈近代〉に内包されざるを得ない。言いつめれば、〈近代〉に対するそのような批判や反動は、それ自体〈近代〉の一つの形態であり、自ら〈近代〉の内部に立っていることを忘れてはならないのである。

中島の〈近代〉批判は、それが日本の軍国主義と植民地主義を批判していた段階では、近代化に対する自己反省、すなわち〈近代〉の内部に立った近代批判の可能性を見せていたと言える。しかし、他者間の愛と融和に対する過信が、結局は中島の植民地主義批判や日本批判を不徹底なものにしてしまう。さらに、『斗南先生』に見られるように、同じく「黄人」としての日本と、アジアを救うべき日本との、二重の性格に日本の独自性を見るという認識が、中島を〈近代〉の外部としての日本を見出す方向へ導いたと思われる。「南島」の問題に戻って考えれば、日本が「救う」べき、南島を含む「東洋」を想像することと同時に、〈中心〉としての日本が見いだされたと考えられる。その過程の中で、南島の他者性が次第に「東洋」内部の差異性へと矮小化されていき、日本が主導する「大東亜共栄圏」の夢想のみ膨らむ中で、中島のアンチ〈近代〉の思考も結局は同時代の思想者たちのそれと同じく、国策に乗せられていく方向へと向かったと見られる。

遺稿となった『章魚木の下で』²⁵において中島は、「書くものの中に時局的色彩を盛ろうと考えたこともなく、まして、文学などというものが国家的目的に役立たせられ得るものとは考えもしなかった」（2, p.23）と語っている。多くの文人が従軍し、いわゆる国策文学が流行し始める中で、このように大胆な発言を放つ中島は、終始批判的な精神を保った文学者と言える。そのような中島であるからこそ、彼がなぜ、また、どのように無意識のうちにも国策の方向に歩み寄っていたのかを確認する作業の必要性を強く覚える。

※テキストは『中島敦全集』（全3巻、別巻1、筑摩書房、2001～2002年）を用いた。旧字旧仮名遣いは

新字新仮名遣いに改めた。引用文の終わりに巻数、頁を略記して入れた。下線はすべて筆者による。

【注】

- 1 中島のテキストにおいては、南洋群島を舞台にした作品群が「南島譚」と題されるように、「南島」と「南洋」との二つの用語がほぼ同義のものとして用いられている。本論では、小笠原や沖縄など、一般に「南洋」と呼ばれていない南の島の問題も含めて中島の「南」との関わりを捉えたいため、論題には「南島」の方を用いた。したがって、本論における「南島」は、主に沖縄、琉球弧を指して「南島」と呼ぶ用法（柳田国男などがそうである）とは区別される。なお、本文中に、テキストの表現との一致を図り、サモア島や南洋群島に対して「南洋」を用いることもある。
- 2 中島と南島の係わり及び関連作品の年代などは論文の最後の付表を参照されたい。
- 3 次に挙げる小森論のほか、川村湊「流水と椰子の実 — 昭和文学の北と南 —」『季刊いいちこ』、第27号、pp.18～29、山下真史「中島敦『環礁』の方法」『国文学解釈と鑑賞』第59巻4号、1994年4月、pp.155～160、松下博文「中島敦『マリヤン』考 — 越境する日の丸（その一） —」『叙説：文学批評』第14号、1997年1月、pp.55～59、須藤直人「中島敦と南洋 — 三つの脱領域、南洋言説 —」『超域文化科学紀要』第3巻、1998年、pp.81～97など多数見られる。
- 4 小森陽一「自己と他者の〈ゆらぎ〉」『〈ゆらぎ〉の日本文学』日本放送出版、1998年9月、p.247。
- 5 ドナルド・キーン『日本文学の歴史』⑭近代・現代篇5、中央公論社、1996年7月、p.165。
- 6 清水元「アジア主義と南進」『岩波講座近代日本と植民地4・統合と支配の論理』岩波書店、1993年3月、p.88。
- 7 1941年前半に脱稿し、『文学界』1942年5月号に一部削除の上掲載。後、作品集『光と風と夢』（1942年7月）に初めの形で収録。
- 8 1941年10月1日付け中島たか宛書簡。3, p.607。
- 9 この点を論じた先行研究は多数存在する。拙論としては「中島敦『蕨・竹・老人』と『巡査の居る風景』 — 二編の関連性を中心に —」『日本文化学報』第25輯、2004年2月を参考されたい。
- 10 1942年11月6日付け中島田人宛書簡。
- 11 1941年11月9日付け中島たか宛書簡。
- 12 1941年11月28日付け日記。

- ¹³ 1941年12月2日付け中島たか宛書簡。
¹⁴ 小坂国継「京都学派と『近代の超克』の問題」, 藤田正勝編『京都学派の哲学』昭和堂, 2001年7月, pp.290~291。
¹⁵ 須藤直人「中島敦と南洋—三つの脱領域, 南洋言説—」『超域文化科学紀要』第3巻, 1998年, p.97。
¹⁶ 近年に新しく発見された作品の一つ。1942年, 南洋群島文化協会発行の『南洋群島』の3月号に三好四郎の名前で発表された。
¹⁷ 1941年9月28日付け中島たか宛書簡。
¹⁸ 近年に新しく発見された作品。1942年, 南洋群島文化協会発行の『南洋群島』の2月号に三好四郎の名前で発表された。
¹⁹ 『「アジア」はどう語られてきたか—近代日本のオリエンタリズム—』藤原書店, 2003年7月, p.97。

- ²⁰ 鈴木貞美『日本の「文学概念」』作品社, 1998年10月, p.335。
²¹ 小坂国継, 前掲書, p.303。
²² 1941年12月14日付け中島たか宛書簡に「いよいよ来るべきものが来たね。どうだい, 日本の海軍機のすばらしさは」とある。
²³ この作品は1933年頃に一度書き上げたものに, 1942年7月に末尾の部分を書き添えて発表された。下の引用は末尾部分より。
²⁴ ハーバーマス, 三島憲一訳「近代—未完成のプロジェクト」『思想』第696号岩波書店, 1982年6月, p.90。
²⁵ 『新創作』1943年新年号初出。最後の病床で書かれたものと推測される。

(主任指導教官: 水島裕雅)

【付表】中島敦(1909~1942)と南島の主な関り

時	1929年	1936年3月	1936年8月	1941年前半	1941年7月初め ~1942年3月初め	1942年3月中旬か ら~1942年12月
出来事		小笠原旅行	中国旅行の前に台湾に寄る		国語編集書記官として南洋庁に赴任	帰京して専業作家の活動を始める
関連作品	『蕨・竹・老人』	『カメレオン日記』、『小笠原紀行』		『光と風と夢』	日記、書簡、『旅の手帳から』、『章魚木』	『南島譚』(『鶏』)、 『環礁』(『真昼』、『マリヤン』、『風物抄』)